



教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. **9**
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成26年(2014)1月31日

目次

- SA特集
SAのホンネ!? —授業補助を通じて考えたこと—
吉野匡哉・佐藤祐衣・森慶太・吉岡志武貴 (スチューデント・アシスタント) …… 2p
- 大学FD研修会 参加報告
山形大学FD研修会 吉永安里 (人間開発学部子ども支援学科助教) …… 7p
日本私立大学連盟FDワークショップ 中田有祐 (経済学部助教) …… 8p
- 平成25年度FD講演会 開催報告
「主体的に学び続ける学生をいかに育成するか —アクティブ・ラーニングの可能性—」
杉原真晃 (山形大学基盤教育院/教育開発連携支援センター・准教授) …… 9p
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力!学生のまなざし!(9)—」
須永和之 (文学部教授) …… 14p
- 名著探訪 —高等教育、この1冊— (第2回) …… 18p
- 教育開発推進機構彙報 (平成25年7月1日~12月31日) …… 19p
- 新任職員紹介 …… 20p
- 啐啄同時 そったくどうじ —編集後記— …… 20p



SAのホンネ!?

—授業補助を通して考えたこと—

國學院大學ではSA（スチューデント・アシスタント）制度のもと、アシスタントの学生が、教育開発推進機構を拠点として、教員の授業運営の補助を行う取り組みを続けています。今回は、現在SAとして働いている学生4名に、自分がSAの仕事につくことになったきっかけや、業務に従事する中で感じた大変なこと、難しいこと、工夫していること、あるいはやりがいや、SAという仕事をどのように捉えているのかなど、考えていることを寄稿してもらいました。



文学部哲学科2年 吉野 匡哉

「SAに応募してみたんだけど、吉野君どう？」二年生の前期が始まって間もない頃、このようなお誘いを同じ学科の友人から受けたのですが、その時は断りました。実を言うと、当時の僕はSAのことをほとんど何も知らず、精々「そういえば、大学からそんな案内のメールが届いていたなあ」と思うぐらいでした。そんなものがあると知ったのもこの時です（後になって知ったのですが、僕はSAの配属される授業を一度も取ったことがなかったため、その存在を知らなかったようです）。

前期も終わり、夏休みが明けると一週間前ぐらいに、再び案内のメールが届きました。そこで前期に誘ってくれた友人に話を聞いてみると、とても勉強になったとのこと、試しに応募してみることにしました。そして無事に採用され、僕もSAの一人となりました。そのため、

SAとしての経験期間はまだ半年にも達していません。そんな新人の立場から、普段の業務を通じて思ったことなどを書いていきたいと思います。

まず、そもそもSAとは何かということについて、簡単に説明します。SAとは「スチューデント・アシスタント」の略で、國學院大學の渋谷キャンパスで開講される、大人数授業のお手伝いをする学生およびその組織のことを指します。大教室での授業の際は、先生の代わりに資料やコメントペーパーの配布および回収、スクリーンに投影するためのAV機器の準備や片付けなどをします。教室にいない間は、先生方から依頼のあった資料を印刷し、必要があればホチキス留めや折り込みもして、担当する授業に備えます。あとは、コメントペーパーの印刷や裁断もSAがやっています！ 学生の皆さんが数えきれない程に書いてきたであろう、あの大小様々なコメントペーパーは、僕達が陰で準備したものだったのです（笑）。

以上のような業務を通して、SAは縁の下の力持ちのような存在として、日々学生や先生方のサポートをしています。

そんなSAの一員となって、良かったと思えることはたくさんあります。

まず、素晴らしい先輩方と知り合えたことです。僕は何のサークル活動にも参加していないため、大学内での交友関係は、同学年の同じ学科の人との間でしかありませんでした。そのため、先輩や後輩と話す機会などは全くと言っていい程になく、狭い交友関係の中で大学生活を過ごしていました。しかし、SAになると、同じシフトに入る人のほとんどが上級生の先輩でした。SAになって間もない新人の僕に、先輩方は優しく丁寧に業務内容



などについて教えて下さり、感謝が尽きません。

ところで、SAになるためには、大学で一定の成績を修めている必要があります。先輩方も勿論この基準を満たしており、話をしていると、勉強についてなど、今後の大学生活における有益な情報が頻繁に出てきます。それを日常的に、しかも複数の人から聞くことが出来る環境にいられることは、SAの魅力の一つであると言っていいと思います。

さらにSAになると、様々な授業について知ることが出来ます。と言うのも、印刷の作業や、業務のため授業をしている教室に入ることで、教材や授業内容に触れることが出来るからです。印刷については、以前に自分が受けたことのある授業の資料を扱うこともあります。ほとんどは受けたことのないものです。その中には、資料だけで興味がわくものもあり、来期はこの授業を受けたいと思うことも多々あります。このように、普通の学生以上に他の授業内容を見聞き出来るのも、SAの業務の特色だと思います。

そして何よりも、日々の業務によって他の学生の皆様に支えているという実感や、それに伴う満足感は何事にも代え難いです。僕達が刷った資料やコメントペーパーによって授業が進む、僕達がAV機器を準備したからスクリーンを使うことが出来るなど、言葉にするとあまり大したことではないかもしれませんが、実際にこういった業務をこなしていると、皆の役に立っているという意識が生まれ、新人であっても「SAで良かった!」と思えます。

それだけでなく、こうして授業の裏側を知ることで、自分が普段何気なく受けている授業もやる気が出てきますし、SAとして他の学生の規範となるような行動も心がけるようになりました。これは自分のためにもなるため、上述したことも含めてSAであるメリットは多大なものなのだと、この数か月で学びました。

来期も勿論、SAは続けようと考えています。そうになると、大学生活において初めて後輩が出来ることとなります。まだまだ学ぶべきことの多さを痛感していますが、



僕にSAの魅力伝えて下さった先輩方みたいになれるよう、精一杯頑張っていきたいと思います。

最後になりますが、教育開発推進機構の先生方、SAの先輩方、僕をSAに誘ってくれた同期のS君には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。そして今後ともよろしくお願いいたします。



文学部史学科3年 佐藤 祐衣

私がSAに応募しようと思ったきっかけは、友人から誘われたことでした。業務を行う場所は大学内なので、自分の時間割とシフトの折り合いをつけやすく、また、SA内の雰囲気が明るく楽しいものだと聞いて応募を決意しました。実際に働いてみると、SAも機構の先生方も皆親しみやすく、とても楽しく業務を行っています。楽しい中でも業務に対しては真剣に向き合っているため、とてもやりがいを感じます。

SAの主な業務は、受講者数が多く、大教室で行われている授業の先生の補佐です。具体的には、その授業で使用する資料やコメントペーパー、出席カードの配布を行ったり、配布する資料を人数分印刷したりといった業務です。出席カード、コメントペーパーは配布したあと頃合いを見て回収し、機構に持ち帰ってから学年、学科、クラス、学籍番号順に分類し、授業を受け持っている先生の元へお届けします。他に、スクリーンに映像を映したり、音声資料を流したりするために使用するAV機器の起動を行う場合もあります。

私が担当しているシフトの主な業務は、資料等の配布・回収です。この業務を行う時は毎回どのように配れば効率が良いかを考えています。授業用資料は座席の列ごとに大まかに分け、前から順に受講生の方に回してもらってから、回りきらなかった席はないか教室を見渡し、足りていなかった所へは可能な範囲で直接配布をするという対応をしています。

しかし、出席カードやコメントペーパーは個人個人に配ることが多いため、正確な枚数を配る必要があります。この配布作業は、1枚1枚数えることに長い時間をかけてしまうと作業が遅れる上に、授業に支障を来してしま

います。そのため、出来る限り速やかに作業を終わらせなければなりません。紙を1枚1枚数えることは単純作業で、とても簡単なことのように感じますが、実際にやってみるとその考えの甘さを思い知らされます。私自身もそうでした。配布するために枚数を数える時、紙が捲れないせいで枚数を数えることに手こずり、焦って必要以上に時間をかけてしまったこともあります。そのため、個々に配布をする際は、配布の速さと正確さに気を付けながらも、焦らず落ち着いて行うようにしています。



配布以外の業務でも難しいものはいくつかあり、授業用資料の印刷にはよく苦戦します。中でも絵や図が多い資料は、黒く潰れてしまったり、刷っている途中で紙が詰まってしまったりすることがあります。原稿を印刷機に設置すれば、後は印刷機が勝手に刷ってくれるものだと思っていたために、初めて印刷の場に立ち会った時はとても驚きました。原稿の読み取り濃度の調節加減などようやく慣れてきた部分もあるため、印刷業務に関してはこのままもっと慣れて行けるように努めたいです。

他に、SA内での連絡、報告をいかに正確に伝えるかということも難しいと感じています。SAは、授業用の資料をどれだけ印刷したか、ソート作業はどれくらい完了しているかといったような、何の仕事が残っているのかについての情報交換を、各シフトが業務日誌に書くことで行っています。当然、そこに記入する内容は簡潔に、見やすく書く必要があります。しかし、簡潔すぎてもしっかりとした情報は伝わりません。加えて、書き方にまとまりが無く、雑然としていても伝わりません。日誌に書いてある情報量が少なかったり、日誌が見にくかったりしたことが原因で、業務がやりにくかったこともありました。

これらの問題は、業務日誌の書き方を徹底し直すことで改善はされましたが、どのように書けば明確に伝わるかという点が簡単になることはありません。そこで、日誌を書く際は、書いた本人だけでは気付かない点もあるだろうと考慮して、同じシフトの人同士で記入をしっかりと確認し、指摘し合うよう心がけています。

SAの業務をするようになって改めて大切だと感じた



ことは、報告や相談といったような「相手に伝える」ことです。作業に行き詰った時に独自の判断だけで勝手に進めてしまうと、その判断が間違っていた時に取り返しのつかないことになる可能性もあります。しかし、相談することが大切だからといって、何から何まで質問するようではいけないとも学びました。

これらは当然のことではありますが、私はこのことに気付くのが少し遅く、しばらくの間は、少しでも分からない点があればすぐに聞くといった姿勢で業務を行っていました。しばしば相談が出来ない状況に直面して、自分で考えることの必要性に気付くことが出来ましたが、SAの業務をしていなければ気付けなかったかもしれません。私自身が未熟者だということもありますが、業務を通して学ぶことはたくさんあり、SAに応募して本当によかったと思っています。



文学部史学科4年 森 慶太

SAの業務は、大人数授業の補助が主な役割です。資料印刷やそのホチキス留め、授業前後のAV機器の準備、片付け、出席カードの配布、回収など、授業が円滑に進行するようにサポートをします。

これらの業務の中で特に難しいと感じるのは、出席カードやコメントペーパーの配布、回収です。単純な作業のように見えるのですが、「タイミング」が非常に難しいです。例えば、授業終了時の回収で、教室に早く行きすぎると、先生や学生の気が散ってしまい、結果としてスムーズな授業運営の妨げになってしまったりします。反対に、



遅すぎると回収に時間がかかり、次の講義に支障が出てしまいます。先生とは事前に打合せをしていますが、タイミングを掴むまで時間がかかります。

また、そのコメントペーパーの作成もなかなか難しいです。講義で使用されているコメントペーパーはSAが作成しています。B6サイズのコメントペーパーは、大きい用紙1枚に4枚分印刷した後、裁断します。裁断はほぼ手作業なので、4枚がなるべく均等になるように丁寧に裁断しなくてはなりません。しかし、一度で1万枚以上作成するので、丁寧にやり過ぎても、時間がかかってしまいます。丁寧かつ迅速にやらなくてはならないので、慣れるまで難しい作業です。

難しい点がいくつかある業務の中で、失敗することも度々あります。私が経験した大きな失敗は、「出席カードの枚数不足」です。授業開始後に出席カードを配布し、すぐに回収するという業務だったのですが、その日は普段より出席率が高く、配布してみると枚数が足りませんでした。急いで不足分を補って配布しましたが、結果的に5分近く授業に支障を来してしまいました。普段から多めに持っていくように心掛けてはいましたが、学生の出席率について勝手に判断したことで、このような失敗を招いてしまいました。この失敗から、出席カードやコメントペーパーに関しては、出席率を意識せず、最初の登録人数だけを考慮して、それに則した枚数を持っていくようにすること、そして余るほど用意していくようにしています。

この他にも、印刷ミスや、AV機器の設定ミスなど、いくつか失敗したこともあります。その失敗のたびにSAのメンバーと情報を共有し、同じ失敗を他の場面で繰り返さないように努めています。

SAの業務は、難しいことや失敗ばかりではありません。中には、良かったと思えることもたくさんあります。その多くは、感謝された時に感じます。先生から感謝の言葉をいただくこともあります。先生から感謝されることもあります。「いつもありがとうございます」や「頑張ってください」と言われた時には、ただの補助ではなく、SAという仕事が学生に伝わっている嬉しさを感じます。こうした言葉により、少しでも授業が良いものになるように更に頑張ろうという励みになります。

また、先生方はもちろんのこと、2年生から4年生までのSAの仲間、職員の方々など、人との関わりが増えたことも非常に大きいです。特に学部、学科の違う先生との関わりは、これまでにない知識を得ることができ、勉強になることが多くあります。普通の大学生活では関わることの少ない人との関わりを得ることができることも、SAならではの良い点であると思います。

私がSAの業務に携わるようになったのは、4年生になってからです。1年間やってきて思うことは、業務を与えられるだけでなく、SA自身での「追求」の部分が多いということです。授業補助という立場ではありますが、決して上の立場にあるわけではなく、同じ学生という立場にあります。そのことで「こうだったらいいな」という学生の意見を直接聞くこと、感じる事ができ、より良い授業補助にできていると思います。

例えば、資料の部数が多い時に、何部配布されているのか分かりづらいことがあります。マイクを使って知らせることも可能ですが、遅れて来た人、配布後に来た人は、情報を得ることができません。そういった学生の目線から考えた場合、黒板やスクリーンに部数を書いて映し出しておく、共通の情報として伝わります。後から先生に聞きに行くことも減り、妨げになることも防げます。どうしたらスムーズにいくのか、どうしたら受講しやすいのか。こうしたことを常に追求するので、大変勉強になります。

SAの業務は、大変なことも多くありますが、良かったと思えること、自分自身のためになることも多くあります。人との関わりの中で、少しでも先生、学生のために貢献したいという気持ちがあれば、応募してみてください。



文学部史学科4年 吉岡 志武貴

SAに応募した理由——

僕自身は、学内で授業補助を行っていたSAの先輩方を見かけて、その時に興味を持ったからです。また、学内のアルバイトでしか経験できないこともたくさんあるのだろうと思い、SAに応募しました。

業務内容——

普段の業務内容は、大きく分けて二つになります。

一つは、授業補助です。授業補助というのは、パソコンの設定やマイクの準備、スクリーン投影の準備といったAV機器設定。そして、授業内で配布する資料の配布や、出席カード・コメントペーパーといった学生一人一人が記入したものを回収するという業務です。また、回収したカードやコメントペーパーを学年・学科別に組み



なおして、先生にお渡しするということを行います。

もう一つは、授業内で使用する資料の印刷業務です。大量に使用される資料を印刷します。その資料が多い場合や、先生からのご依頼がある場合は、ホチキス留めを行っています。

業務は大きく分けると上記二つとなります。しかし、これらの他にコメントペーパーの印刷・裁断も行っています。

業務上の注意——

業務上注意していることは、配布資料の印刷や配布枚数を間違えないこと、機器の動作にトラブルがないかどうかといったことです。

印刷に関しては、印刷枚数の確認や両面印刷・片面印刷などの違い、写真と文章がしっかりと印刷されているかどうかなど、細部にわたって注意しています。印刷した資料が不鮮明であった場合、配布時に学生の皆さんに迷惑をかけてしまうので、一番注意しています。

配布資料に関しては、大教室は机が区割りされているため、配布する枚数が着席人数と異なると授業の遅延を招いてしまうので、配布に慣れないと苦勞する点です。

AV機器は調子の悪い時があるので、しっかりと作動するかどうかを見届けてから教室を退出するようにしています。



配布資料が過去分と当日分に分かれて存在する場合には、学生の皆さんが混乱しないように、分けて置いたり、スクリーン上で知らせるなど、使うことのできるすべてのツールを使って呼びかけを行うようにしています。

難点・失敗——

難しかった点は、教室によってAV機器の操作法が異なること。普段僕たちが使っている印刷機と業務で使う印刷機に違いがあったことです。AV機器に関しては、教室によってスイッチの押す順番やリモコン対応の有無が異なり、また、音声や映像が出なくなるトラブルなどもあります。それらに対応すること、覚えることが特に難しかったです。

印刷機は、印刷を行う前に製版動作を行う必要があったり、印刷物を配置する位置が異なっていたりしたため、SA

に入りたての時は何度か間違えてしまった覚えがあります。

失敗したことは、両面印刷の資料を片面で印刷してしまったことです。これは印刷依頼書を見間違えることからよく起きるので、「初心忘るべからず」という言葉がよく身に沁みます。

良かったこと・ためになったこと——

ためになったこと、良かったことは、印刷機の使い方を覚えることができたということが一番に挙げられます。製版作業からインクの交換、紙詰まりの対処等、一連の対処を経験できたので、この経験は一番大切にしていきたいと思っています（単に一番トラブルに遭いやすかっただけかもしれませんが…）。

また、資料配布時には、着席数を見ただけでどのくらいの枚数を配布すればいいかがわかるようになりました。これができるようになってからは、配布資料が足りないと言われることがなくなったので、状況把握のスキルがついたのでは、と思います。

何より、業務を行っている上で、機構にいらっしゃる教職員方や、授業補助を行っている先生方から「ありがとう」と言ってもらえることが嬉しく、業務の励みになります。

伝えたいこと——

SA業務は、様々な責任と隣り合わせの業務だと思います。始めのうちはいろいろなことを失敗します。でも、一緒に仕事をしている仲間がいつも相談に乗ってくれたり、手助けをしてくれる、そんなアットホームな仕事場です。印刷や配布など普通の学生生活ではできないような色々な経験ができます。また、仕事に対する責任感も膨らみ、達成感も得ることができます。

最初はだれでも初心者です。ですが、SA一人一人が支えあって業務を行うので、楽しく仕事ができると思います。仲間との連携をとることを学べる、そんな明るい職場です。ここで経験できることは、どこでも役に立つものだと思います。

追伸——

コメントペーパーのありがたさを身に染みて実感することができますよ（笑）。



大学FD研修会参加報告

第13回山形大学FD合宿セミナー

「相互研鑽による大学教育の飛躍をめざして」



吉永 安里
(人間開発学部子ども支援学科助教)

主催	山形大学教育開発連携支援センター
日時	平成25年8月26日(月)～27日(火)
場所	山形大学蔵王山寮

8月末、クーラーいらずの涼しい山形大学蔵王山寮で行われたFD合宿セミナーに参加する機会をいただいた。学生が主体性をもって能動的に思考する学生参加型の授業、今、大学で流行の兆しを見せているアクティブラーニングを取り入れた授業づくりについての研修である。

私はこの3月まで小学校に勤めており、子どもたちが必要感をもって主体的・能動的に課題に取り組み、他者と協働し学び合う授業は当たり前のことと考えてきた。むしろ、なぜ、今頃大学でアクティブラーニングがもてはやされるのかと、批判的に捉えてすらいた。ところが、いざ大学で教える段になると、大学でのアクティブラーニングの難しさに直面した。特に、総合教養では、多様な専門性や経歴をバックグラウンドにもつ、週に一度しか顔を合わせない学生達と授業をつくらねばならない。情報がほとんどなく、信頼関係も築けていない学生とインタラクションすることがいかに大変か、思い知らされた。

初めての大学での授業を反省しつつ、本研修では、講師の先生が実践されているアクティブラーニングのコツをご教授いただき、また、ワークショップでのアクティブな学びの体験や、参加者同士の深夜に及ぶ熱い議論を通して、自身の授業を省察し、アクティブラーニングについての見識を広めることができた。誤解を恐れずに言うならば、アクティブラーニングにおいて、必ずしも学生同士がインタラクティブである必要はないという気づきを得たことは、まさに目から鱗であった。授業で取り上げる知に、学生がどれだけ興味をもち、これまでの経験や学びと結び付けたり、新たなものの見方を獲得したりしていくかが大切であって、形としてのインタラクションはむしろ必要ないともいえる。

しかし、あえて私は後期の授業でも、学生同士のインタラクションを取り入れている。プリントや教科書といった狭義のテキストとの関係だけではなく、自分と異なる経験や専門性をもつ他者というテキストと出会う中で、学びはより活性化し、より充実すると思ったからである。前期は全体での話し合いを行なったが、週に一度しか会わない学生同士ではハードルが高いことをFD研修で再認識した。そこで、小グループでの話し合いから全体での話し合いにつなげていく方法を取り、学生の発言への精神的負担を軽減する工夫をした。さらに話し合いへのコミットメントについて、自己評価と小グループのメンバー同士の相互評価を行うことにした。学生たちは、約20分の小グループでの密な話し合い、その後の15分ほどの全体での意見交換や議論を通して、初めは一人一人話すのもぎこちない関係から、授業後も、他学年・他学科の学生同士が声を掛け合い、学び合う姿が見られるようになってきた。私のところに意欲的に質問や意見を求めにくる学生も出てきた。

本研修を経て、今、大学での授業づくりに、さらなる可能性とおもしろさを見出し始めている。ひとえに、本研修を薦め、手配くださった教育開発推進機構の諸先生方並びに事務の皆様のお蔭である。末筆ながら、御礼を申し上げたい。

平成25年度FD推進ワークショップ(新任教員向け) 「大学教員の職能開発とFD」



中田 有祐
(経済学部助教)

主催 日本私立大学連盟・教育研究委員会
日時 平成25年8月9日(金)～10日(土)
場所 グランドホテル浜松 (静岡県浜松市)

はじめに自己紹介をさせていただきますと、私、2013年度より本学経済学部に着任いたしました中田有祐と申します。ここでは、本年の夏に参加した私立大学連盟主催のFDワークショップの感想などについて述べさせていただきます。

ワークショップは、比較的教歴の浅い教員を対象とし、授業のスキル向上を目的とするもので、泊まりがけで2日間にわたり開催されました。私自身、本学が初めての専任のため、他の先生方に比べて教歴はゼロに等しい程度で、ワークショップ参加前は授業に関してまったく自信はありませんでした。特に、グループワークで模擬授業を行うということで、戦々恐々といった気分で当日を迎えたことが記憶に残っています。

1日目の全体研修では、種々の説明のほか、昨年度の参加者のうち何名かがパネリストとなり昨年度のお話をして頂きました。が、「明日のグループワークをどう乗り切ろうか」と、心は半ば上の空。夜の懇親会で幾分かは気持ちが紛れましたが、それでも「明日、どうしよう…」と、ドキドキ感満載の夜を過ごしておりました。

2日目、私の模擬授業の順番は2番目で、1番目の先生の時間は、これまた半ば上の空。ついに私の番、何とか無事、模擬授業を終え…ることができず、内容の途中で時間が来てしまいました。それでも、グループの他の先生方からは、温かいお言葉や貴重なご意見、さらにはお褒めの言葉まで頂戴することができました。その後は、自分の出番が終わったこともあり、リラックス・集中して先生方の「技」を色々と拝見させていただきました。臨場感満載で授業をされる先生や、まるで手品のような手法で学生を驚かせ、また魅了させる先生。ここでは書ききれないほどのさまざまな「技」を学ぶことができたと思います。

そうこうしているうちに、終了の時間。最初は不安ばかりでしたが、終わってみれば楽しく、そしてとても有意義な2日間を過ごすことができました。何より、他の先生方も、同じように授業方法で悩んでおられるということが分かったことで、ある程度の開き直りをもって授業に臨むことができるようになったことがこのワークショップでの一番の収穫だと感じます。現在は、日々、試行錯誤の繰り返しではありますが、開き直りをもって臨むことで余裕もでき、以前よりも学生の目線に立った授業を展開できているように思います。

最後に、このような機会を与えてくださった教育開発推進機構の皆さまに、心より御礼申し上げます。次第でございます。



主体的に学び続ける学生をいかに 育成するか

—アクティブ・ラーニングの可能性—

講師 杉原真晃（山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センター・准教授） ※肩書きは当時のものです

日時 平成25年7月3日(水) 15:30～

場所 渋谷キャンパス 若木タワー地下1階02会議室



アクティブ・ラーニング、あるいは学生主体型授業と言われる、学生が自ら主体的・能動的に学修を進めて行く授業運営の重要性は、今や広く認識されつつあります。その取り組みをどのように促進するか、そこにどのようなメリット・デメリットがあるのか、具体的な授業実践の在り方とは——これらの点について、山形大学の杉原真晃先生をお招きしてお話をうかがいました。今回は、その概要を紹介させていただきます。

リット・デメリットがあるのか、具体的な授業実践の在り方とは——これらの点について、山形大学の杉原真晃先生をお招きしてお話をうかがいました。今回は、その概要を紹介させていただきます。

はじめに——アクティブ・ラーニングとは

アクティブ・ラーニングとは、学生が能動的に学習を進めて行くこと、またそのような授業形態・方法を指す。授業方法としては、PBL (Problem/Project based learning)、LTD (Learning Through Discussion)、ディベート、フィールドワークなどが挙げられる。

また、従来から行われている演習・実技・実験などもアクティブ・ラーニングに含まれる。その意味で、この概念は必ずしも新しいものではなく、これまでも行われて来たような、能動的学習を促す演習等の授業形態を発想のベースに置きつつ、そこからの発展・進化として考えて行くこともできるものである。

1

アクティブ・ラーニングが求められる社会的事情

今日アクティブ・ラーニングが求められる社会的事情として、大きく二つが挙げられる。

一つは、高等教育のユニバーサル化に伴う学生の学習意欲等の低下への対応が課題となっていることである。たとえば、所謂ボーダーフリー大学（試験をしなくとも入れる程度の倍率）の学生についての調査事例では、学習意識が高いにもかかわらず授業への期待は低く、授業外ではあまり勉強をせず、かつ、サークル・クラブ活動にもあまり熱心ではない傾向が指摘されている。また、疑似出席や中抜け、私語、携帯やゲーム、暴言・暴力等の逸脱行動も比較的多いとされている。

二つ目は、臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や、科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性等の育成が求められていることがある。

たとえば中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(2012.8.28)には、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学習（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」とあり、具体的にはディスカッションやディベート、演習・実験・実習・実技等を中心とした授業への転換ということが提言されているように、高度な能力・創造性を射程に入れた展望が為されていることが注目される。

2

アクティブ・ラーニングを支援する教育方法

能動的学習を支援する教育方法について、具体的には以下の点に留意して考えて行く必要がある。

(1) アクティブ・ラーニングの位置づけ

主体的に学び続ける学生を育成するためには、①どのような制度・カリキュラム・授業・課外活動が求められるか、②授業者はどのような役割を担うのか、③主体的な学習に影響を及ぼす要因としてどのようなものがあるか、④必要な人員・施設・設備・予算・組織構造、につ



いて検討して行く必要がある。

(2) どのような「アクティブ」を期待するのか

主体的な学習のあり方については様々な分類例があるが、受動的・消費者的な態度での受講から能動的・生産者の態度での受講へ、理解のレベルの浅い学習から深い学習へと導いて行けることが望ましい。

また、知識観・学生観・授業の目的・人間関係・学習環境・授業の前提等の種々の観点において、学生が受動的スタイルを取るような旧型のパラダイムを、学生が能動的な学習を行う環境を整えるための新たなパラダイムへと転換して行くことを目指す必要も考えられる。

期待される「アクティブ」の内容について、各大学、学科、コース等で検討し、共有して行くことが必要である。

(3) アクティブ・ラーニングのメリット、デメリット

アクティブ・ラーニングにもデメリットはあり、たとえば教員によるファシリテーションが難しいこと、活動的にはなっても、学びの深まりが得られない場合があること、教えるべき内容が多く、活動を取り入れる時間的余裕が厳しいこと、教員の負担が大きく、また偏りがちであることなどが挙げられる。

特に、学生にグループワークや発表をさせる場合、一部の意欲的な学生に負担が偏るため、参加に意欲的でない学生はフリーライダー状態になることがあり、またそうした環境の中で熱意ある学生が意欲を喪失する、あるいは受講生の中で浮き上がってしまい精神的なストレスを感じる場合もあることから、これらの問題点について、教員はよくよく熟慮しつつ取り組む必要がある。



他方で、それを越えて行くだけのメリットもあると我々は考えており、望ましいワークの進め方などを例示したビデオ教材を作成するなどの取り組みを行っている。

(4) アクティブ・ラーニング実施の際の留意点

学生が主体的に学ぶよう工夫して授業をしても、やはり、学生側の努力もどうしても必要になる。それを引き出すためには、まずは学生が主体的に学習しない要因を診断しなければならない。学生を良く観察するとともに、アンケートや質問用紙、インタビューなどで学生の状況を把握する必要がある。

特に、授業前や初期にあらかじめアンケート等で学生の既存知識等に関するプレ評価を行い（診断評価）、中盤に学生の学習状況の把握、および授業計画の修正を念頭においた中間評価を行ってチェックを行い（形成評価）、最後に成績評価（総括評価）を行うというように、評価を組み合わせることで、学生の学習のあり方をより良く把握できる。また学生側も、適切な自己評価・向上を行うための良い手がかりを得ることが可能になる。

3 主体的に学習をしない要因

学生が主体的学習を行わない要因としては、大きく三つの区分が認められる。一つ目は、学生が主体的な学習のあり方を知らない（たとえば、レポートやノートの取り方がわからない、等）という知識的要因である。二つ目は、たとえばレポートの書き方等について、一通りのマニュアル的な知識は有していても、実際にそれを自身





の学習に活かして行けない、技能的要因がある。

これらの要因については、授業時間の内外で主体的学習を課す、教員からアドバイスをする、参照できるテキストを作成・活用する、ICTやTeaching Assistantを活用する、主体的学習の機会を増やす、繰り返し行わせるなど、様々な方法で対応することが可能である。

しかし、最も問題なのは、三つ目の、そもそも学習に向けての意欲がわからないという情意的要因であろう。理由は色々と考えられる。まず挙げられるのは、進学動機と自分の専門分野に関する適応度に関わるもので、両者の関係についての調査では、学生を大学に適応している高適応群と、あまり適応できていない低適応群に分類して比較したところ、進学動機について、高学歴群は自分の興味・関心を活かせる、希望職業に就ける、自分が必要とする資格を取得できる、等を挙げる傾向が強かったのに対して、低適応群は、学歴の取得、周囲に勧められたから、等を挙げる傾向が強かったと報告されている。また、学生へのアンケートを活用した調査によると、板書や話し方、配付資料のわかりやすさや、説明・解答のレベルの適切さに問題がある場合、また教員の遅刻や授業の延長などがよく見られる場合に学習意欲の低下傾向が見られる。特に、教員側の「これはやさしいだろう」という意識と、学生側の意識との間にかかなりの乖離が見られることは重要で、その改善のためにも、先に述べた診断評価や形成評価を行っていくことが望ましい。

更に、「ARCS」モデルから要因を考えることもできる。ARCSとは、Attention（注意）・Relevance（関連性）・Confidence（自信）・Satisfaction（満足感）の四つであり、Aは学生に対する注意喚起、Rは学生の目的志

向性や興味・動機との一致、Cは学生に自信を抱かせること、Sは内発的な強化・外発的な報酬・公平性の必要性といった事柄を念頭に置いている。これらの四つを適切に確保しつつ授業を行うことが、学生の主体性を引き出す上で有効であると考えられる。

4 講義型授業での実践事例

具体的に、講義型授業と演習型授業の実践事例を紹介したい。まず講義型授業の例として、必修の専門科目「保育課程総論」を紹介する。これは短大の2年生を対象とする60名規模のクラスで、60～70分の講義の後、演習を行うようにしている。保育課程とは指導案のより広い概念であり、保育計画と考えていただければ良い。講義とテストだけでは、ARCSモデルのAとSが欠如してしまうことから、演習部分にテキストの内容を活用するワークを導入し、あらかじめ授業時間外にテキストの内容を読んでおくよう指示している。

しかし、ここに幾つかの問題点が出来た。第一には、学生が教科書を覚えることを目標としてしまいがちとなり、授業内容を保育実践の場で活用することができないこと、またそのためにモチベーションが上がらないこと。第二には、教育という営みに一般に言えることではあるが、教室内の活動だけでは単一の価値観に縛られがちであり、多様な状況が現出する保育実践の現場での対応が困難になってしまうことである。

このような問題点への対応として、具体的で多様な状況を想定したケーススタディを導入して、様々な状況・方法・理解及び価値観を提示しつつ、学生にそれらへの対応を考えてもらうようにしている。

また、学生達は教えられたことをそのまま覚えたり、再現したりすることには慣れているが、「考える」ということには慣れていない。その習慣を身につけてもらうため、まずは講義を聴き、テキストを読んで考えたことを自由に筆記させ、それに対して、他の視点や観点に対する気づきを引き出すような助言や提案を行った上で、先に記したことを書き直させたり、他の人の意見を想定して書いてもらったりするなどの方法を採用している。

5 演習型授業での実践事例

続いて演習型授業での実践事例であるが、教養教育科目「秋からのキョウヨウ教育必勝法」は、グループ学習、アクティブ・ラーニングを基盤とした30名程度の受講生を対象とした課題探求型授業である。自分自身で知りたいことを見つけて、それについて探究するという内容である。中途に個人面談を挟みつつ、最終発表（プレゼンテーション）と最終探究レポートを対象に評価を行う。

ここでも、次のような問題が発生している。第一は、活動の自己目的化である。学生から「何のために探究するか」「何を知りたいか」という当初の目的が見失われ、活動的にはなるものの、肝心の探究が深まらないまま「単位を取得するために」「良い成績を取るために」という方向に意識がシフトして行ってしまう傾向が見られた。

第二は、学習目標の下方修正である。探究は常にスムーズに進むわけではないことから、学習目標の自己決定が可能なこうした授業では、しばしば、困難な課題から逃避し、目標基準の設定を自ら下げることがある。

第三に、探究には時間がかかることから、他の授業や、サークル活動、アルバイトなどで忙しい学生は、探究の優先順位を下げてしまう傾向が見られる。



以上のような問題点については、次のような対応を行っている。①学生同士でお互いに発表をさせ、意見交換を行うなど、相互研鑽を行わせる。②個人面談を充実して、進捗状況を確認しつつ、アドバイスをを行う。③探究活動を通じて身につく能力や、評価基準を明示する。④探究計画書に毎週の成果を記入・貼付させるなど、探究成果を可視化する。⑤資料・データと、情報、知識、

学問の違いや、アカデミズムとジャーナリズムの違いなどについて伝え、授業における探究の方針について、何故知りたいか、知りたいことが体系化されているか、一般性・普遍性があるかなど、問い直しや振り返りの仕方を提示する、等である。

おわりに——今後の展望

以上、アクティブ・ラーニングへの取り組み方と、それに伴うメリット・デメリット、および改善の具体的事例について説明した。

今後もこうした試みを続けながら、更に試行錯誤しつつ、ICT・学習環境の整備、分野別の実践事例・理論の蓄積、データに基づく検討・改善、授業とカリキュラム・制度の向上などを図り、同僚性を基盤とした、教職員（そして学生）の教育・学習コミュニティの構築を目指して行きたいと考えている。そうした営み自体が、有効なFD活動として機能して行くことになるはずである。

講演の中では、それ自体アクティブ・ラーニングの実践事例として、数回にわたるグループ・ワークが行われました。講演の内容を参照しつつ、國學院大学の教職員が、これまでの経験や、日頃接している学生の様子に照らして、大学の授業の現状がどのように捉えられるか、そこからどのようにして学生主体型の授業実践に向けて工夫して行くことが可能か等について、活発に討論を行いました。

※なお、今回の講演の詳細な内容については、改めて『國學院大学教育開発推進機構紀要 第6号』（平成26年度後期刊行予定）への掲載を予定しています。

大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（9） —



資格課程の第四回となる今回は、図書館司書課程・学校図書館司書教諭課程の授業を紹介します。「学習指導と学校図書館」担当教員の須永和之先生には、授業実践やその工夫に留まらず、本学の図書館司書課程の特色や就職について、また図書館についての学びから社会についての学びへと視野を広げて行く取り組みについても語っていただきました。また、受講している学生や卒業生からも、授業を通して学んだこと、考えたことについてコメントを寄せていただきました。

である都道府県立図書館と市町村立図書館、および東京特別区（23区）の図書館を総称する公立図書館と、民法34条による法人が設置する私立図書館があります。ですから、厳密に言えば国立国会図書館、大学図書館（短期大学図書館、高等専門学校図書館を含む）、専門図書館の職員は「司書」ではなく、「図書館職員」です。現在、図書館には司書の資格を有する正規職員（公募試験などで採用された職員）のほかに、派遣職員、業務委託された会社に雇用される職員、臨時職員などの非正規職員がいますし、職員ではありませんがボランティアとして図書館活動に参加する人たちがいます。利用者から見れば、図書館の業務に関わっている人はすべて「職員」であり、外見からでは「司書」という資格は識別できません。

学校図書館の職員も一様ではなく、複雑で混沌としています。昭和28年制定の学校図書館法第3条で学校図書館が必ず置くことになっていますから、ほぼ100%の学校に学校図書館が設置されています。第5条では（教育職の）司書教諭を置くことになっています



教員の授業努力

「学習指導と学校図書館」
須永 和之
(文学部教授)

○図書館の資格に関する2つの課程

本学の図書館に関する課程には2つの課程があります。図書館司書課程では図書館司書を、学校図書館司書教諭課程では司書教諭を養成しています。

一般的に「司書」というと図書館で働く職員を表わしますが、昭和25年制定の図書館法における公共図書館の有資格の専門職員を意味します。ここで言う「公共図書館」には、いわゆる町の図書館



が、制定当時、司書教諭を養成する課程が少なかったために、半世紀近く、司書教諭を置く学校は少なかったのです。平成9年の学校図書館法改正により、平成15年4月から12学級以上の学校に司書教諭が置かれるようになりましたが、資格を有する多くの教員が学級担任や教科担任を優先して司書教諭の実務を担当できないのが現状です。そこで、資格要件の無い「学校司書」という職員が学校図書館を担当している学校が多くなってきています。ボランティアが関わるケースも多く、謝礼金で賄われる有償ボランティアという人たちが学校図書館に関わっている場合もあります。

本学の図書館司書課程では、公共図書館の専門職員としての司書を養成するだけでなく、国立国会図書館、大学図書館、専門図書館の職員となる資質を持つ者も養成します。特に日本の資料だけでなく、海外の資料の知識を身につけるために洋書目録作成の演習も科目の中に組み入れています。歴史や古典文学に強い本学の特色を生かして、選択科目で古文書などの資料の扱い方も学べるようにしています。

○図書館と社会をともに見つめる姿勢

最近では大型書店、出版流通業者（取次店）、情報産業などで司書の資格を持つ者を採用する傾向があります。そのため、公共図書館に関してだけでなく、図書館を取り巻く社会状況、著作権を含む知的財産権の問題、出版事情、情報通信技術についても幅広く学べるように工夫しています。平成24年度からは司書課程の科目は省令科目になりましたので、教える内容の範囲が示されているのですが、社会に巣立つ者を養成する大学の果たす使命を考えて、「図書館から社会を眺めてみる、社会から図書館を見つめてみる」という姿勢を身につけられる授業を展開したいと考えています。図書館司書課程、学校図書館司書教諭課程ですから、公共図書館と学校図書館の知識や技能についてだけ教えていれば十分ですが、せっかく大学で学ぶのですから、もっと視野を広げて、図書館という窓から社会で起こっている問題を学生たちと考察してみたいと思っています。

たとえば、図書館に関連する分野で電子書籍の普及が問題になっていますが、出版流通、著作権という経済や法律、政治の問題もそこに絡んできます。あるいは公立の義務教育諸学校の学校図書館の資料を充実させるために、日本政府は地方交付金措置を行っていますが、これを考えるには日本の政治、財政、地方行政を理解しなければなりません。「図書館」という、とても狭い窓ですが、そこから見えてくることは多くの分野へパースペクティブ（遠近法のように）広がっています。

学校図書館司書教諭課程の科目の「学習指導と学校図書館」という科目では、学習モデルに基づく資料や情報の活用の仕方を学びます。アメリカや英国で考案された情報活用能力を高める学習モデルでは、発想法の一つであるブレインストーミング（短時間・少人数で多くの意見を導き出す方法）やコンセプトマッピング（さまざまな事項を線で結びつけて「概念の地図」を作成する）を用いて、解決する問題を明確にして、図書館やコンピュータを使って、情報を探索します。次に、発見した情報の信頼性を吟味して、取捨選択して、発表資料やレポートにまとめます。最終的には、一連の過程を能率的に捗ることができたか、効果的な情報の伝達が発表やレポートで実現できたかを自己評価します。ここで学ぶことは司書教諭として身につける内容ですが、学校の児童生徒が身につける基本的な技能（スキル）ですから、学生たちにとっては大学の科目の発表や



レポートに役に立ちますし、社会に出てからは組織の中でのプレゼンテーションにも役に立ちます。実際、高等学校までの授業で、発表の仕方、レポートの書き方を学んでこなかった学生たちに、「学ぶことができて良かった」と好評を得ています。

授業では、今、目の前のテーマと向き合い、必要な情報を収集して、自分の考えを整理して、レポートや発表の形で発信して、一連のプロセス（過程）を自己評価する問題解決能力を育成するようにしています。図書館司書課程と学校図書館司書教諭課程で学ぶことは、図書館への就職につながるだけでなく、大学生活、および社会のさまざまな分野に応用のきく内容だと考えています。

授業で学生たちに語りかけるとき、その学生が図書館の職員になったらと想定して、未来の利用者たちに語りかけていると想定しています。学生たちの背後に無数の図書館の利用者が存在していると感じて、授業を行っています。

○渋谷キャンパスは図書館に恵まれている！

本学の渋谷キャンパスは、さまざまな図書館を利用するには絶好の場所にあります。何ととっても、東京都立中央図書館が徒歩15分程度のところにあります。大学のすぐ近くには渋谷区立渋谷図書館もあり、臨川小学校内の臨川みんなの図書館も近い。原宿には渋谷区立中央図書館があります。大学図書館は青山学院大学など、近距離にあります。専門図書館は、青山通り沿いにカナダ関係の資料を所蔵するカナダ大使館内のE. H. ノーマン図書館、ドイツの歴史・文学に強い東京ドイツ文化センター図書室、恵比寿ガーデンシティ付近にフランス関係の資料を所蔵する日仏会館図書室、写真に関する資料を所蔵する東京都写真博物館図書室があります。国立国会図書館の本館へは、渋谷駅から半蔵門線で最寄りの永田町駅まで、わずかな時間で行ける距離にあります。これだけ恵まれた条件の大学は数少ないでしょう。



○図書館への就職

2012年の日本図書館協会の統計によれば、日本には公共図書館が公立と私立を含めて3,234館あり、大学図書館は国立大学法人・公立・私立、さらに短期大学、高等専門学校の図書館を含めると1,679館あります。公共図書館と大学図書館合わせて約5,000館あると考えてよいでしょう。

日本には小学校・中学校・高等学校と特別支援学校が約40,000校あります。学校図書館法によって学校に必ず学校図書館を設置することになっていますから、学校の数だけ学校図書館があると考えられます。

専門図書館はさまざまな主題の資料や情報を扱っていて、企業や研究所の資料室、美術館・博物館の図書室、公共図書館や大学図書館の特殊コレクションなど、さまざまな形態があり、一概に総数を示すのは困難です。

以上のことから、日本には図書館が少なく見積もっても47,000館くらいあると考えられます。

公共図書館のうち公立図書館の正規職員になるには、都道府県、市町村、東京特別区の公務員試験を受験する必要があります。以前は司書職としての採用がありましたが、公的機関の民間活力導入という、PFI、指定管理者制度などによる経営手法を導入する図書館が増えて、非正規職員の採用が多くなりました。それでも本学では現役の4年生と卒業生が毎年、数名、正規職員で公共図書館への就職を果たしています。

大学図書館の職員になるには、国立大学図書館の場合、国立大学法人等職員採用試験の事務職（図書系）を受験します。以前は人事院が実施する国家公務員Ⅱ種試験で採用されました。実は、私も本学を卒業して国家公務員試験に合格して、筑波大学附属図書館、図書館情報大学附属図書館で働いていました。その頃の同僚に、本学出身者が数名いました。これまでも採用試験に合格して、山形大学附属図書館などに就職している卒業生がいます。

教員採用試験に合格して、司書教諭の発令をうけている卒業生も、正確な数は把握していませんが、相当数います。

専門図書館は規模が小さいため、職員の採用は稀です。

図書館以外でも、トーハン、図書館流通センターなどの書籍流通業者、通称は取次店という出版関連の企業に就職している卒業生もいます。また、情報関連業者にも就職しています。図書館司書課程や学校図書館司書教諭課程で学ぶことは、さまざまな分野で応用が利きます。

講義と演習を着実に受講すれば、資格は取得できます。しかしながら、司書、あるいは図書館職員は多くの人が憧れる職業の一つで



すから、仕事に就くまでの道のりは大変厳しいものです。王道はありませんが、就職に関する情報をフルに活用して、課程の受講とともに採用試験に向けての勉強にひたすら励めば、道は開けます。受講する学生には大きな夢を抱いて、邁進してもらいたいと願っています。

受講学生からのコメント

一図書館司書課程を受講して—
文学部史学科3年 宮本 愛

私が図書館司書課程を受講しようと思ったのは、「司書の人は、普段一体どのような仕事をしているのだろう」という単純な好奇心からでした。受講前は具体的に何を学んでいくのか全く分からない状態でしたが、実際に授業がスタートすると、毎回新しい発見と感動があり、いつしか図書館の魅力に引き込まれていくようになっていました。

司書課程の授業では、図書館に関する基礎知識を講義形式で学ぶことから、パソコンを使った情報検索演習といった実践的なものまで、司書になるために必要な幅広い知識や技能を身につけていきます。図書館の種類から司書の仕事まで、図書館に関することを幅広く学ぶ「図書館概論」は、司書の仕事がいかに多様なものであるかを知ることができ、また、私が図書館の面白さを感じるようになるきっかけとなった授業でした。「情報資源組織演習Ⅰ」では、資料のタイトルや著者名などの書誌情報が記されているカード目録を、『日本目録規則』に従って作成していきます。初めは苦戦しましたが、毎週提出するカード目録を先生が添削して個別に解説をしてくださるので、回数を重ねるごとに理解が深まっていき、成長を実感することができました。また、「情報資源組織演習Ⅱ」は『日本十進分類法』を使いながら図書に分類番号をつける技術を身につける授業です。この授業を通して、図書館にある図書の番号は細かい規則によって付与された「全て意味を持つもの」であるということを知り、感動を覚えました。この分類番号があるからこそ、私たちは膨大な数の資料の中から目的の資料を探し出すことができるのです。とはいえ、自分が探している資料を自力で見つけるのが難しいこともあります。「情報サービス演習Ⅰ」では、このように利用者が求めている情報が得られるように適切な資料を提示する「レファレンスサービス」の方法を学びます。授業や課題を通して実際に様々な辞典や資料を手に取り、自分の目で確認していく作業は想像していた以上に時間がかかり、苦労を要するものでした。しかし、探していた答えが見つかったときの喜びと達成感は非常に大きく、自信にもつながりました。同時に、司書というのは高度な専門性を有し、幅広い分野を常に学ばなければならない職業であることを実感しました。

司書課程を受講して2年が経とうとしています。司書課程の授業は単に司書になるための知識や技能だけでなく、様々な面で私を成長させてくれたと思います。司書課程はあくまで「資格」の領域を出ないものなのかもしれませんが、「図書館学」という視点で見れば、非常に奥が深く面白い、ひとつの「学問」であるとい



えると思います。私は司書課程の勉強を始めて、「資格」としてだけでなく「学問」としての魅力を感じるようになりました。私が図書館の面白さに気づくことができたのは、やはり司書課程の先生方の「熱心な授業」にあったと確信しています。

文学部日本文学科4年 竹内夏奈子

私が図書館司書課程を受講するきっかけになったのは、中学時代の職場体験でした。たまたま地元の図書館で職場体験することになり、そこで図書館員として地域の人々の生涯学習を支え、個人のニーズに合った資料を提供することへのやりがいと喜びを感じることができ、その経験から司書になりたいという想いが芽生えました。大学に入って、司書課程を受講することは夢の実現への第一歩でした。

司書課程の授業では、講義を聞くだけでなく、実技的な作業や課題も多くありました。目録を作成したり、過去にあったレファレンス事例から自分なりの資料提供方法を考えたり、実際に図書館を訪問してその図書館の特徴を発表し合ったりするなど、知識だけでなく司書に必要な技術も身につけることが出来たと思います。講義を聞いているだけでは気付けなかったことを実技で発見し、反対に講義で学んだことが実技で活かされたので、知識や技術により深みが増したと思います。

また、図書館司書課程を受講したおかげで、司書としての専門性だけでなく社会人として必要な能力を身につけることも出来たと感じています。例えばレファレンスの授業では、実際のレファレンス事例が課題として出され、利用者の求める資料をどうやって探せばいいのか、そのプロセスや考え方を重点的に学びました。その結果、様々な視点から主題へアプローチしていくための視野の広さや考え方、課題解決能力、インターネットの活用法を身につけることが出来ました。

就職活動では、図書館司書以外の業種も視野に入れて活動していました。司書の採用はとても少なく、最近では非正規雇用という形で職員を採用する図書館が多いと授業で学んだからでした。そのような現状でも、私が図書館職員の内定を頂けた理由に、図書館司書課程で培った司書としての専門性と社会人としての必要な能力が評価された部分があるのではないか、と思っています。図書館司書課程で培った能力をもって、社会へ貢献していきたいと思っています。

卒業生からのコメント

—学んだ「基本」を大切に—
110期日本文学科卒 込山久美子

國學院を卒業し、まちの図書館の司書として働き始めて、早十年以上になります。

司書の仕事は、貸出や予約資料の手配、レファレンス（調査・相談）など利用者に直接接する仕事のほか、蔵書の購入から除籍までの管理・選別、図書館だよりの発行やホームページの更新といった広報、講座の企画・実施、さらには施設の管理や予算の執行……と様々です。

図書館司書の腕の見せ所である「レファレンス」も、公共図書館ではあらゆる分野についての相談が寄せられます。日本文学科卒の私ですが、英語で書かれた医学論文の複写を依頼され、検索に悪戦苦闘したこともあります。

学生時代に司書課程で学んだことは、こうした日々の業務を行う上での基本になっています。

司書課程を履修していた時、ちょっと大変だったけれど、おかげでしっかり身についたなと思っているのが、資料組織演習で目録カードを書いたことです。

國學院の司書課程では、資料組織演習という科目（現在は情報資源組織演習）が、分類法の演習と和書目録法の演習、洋書目録法の演習のそれぞれ半期ずつの三科目になっていました。演習がこのように分かれているのは、他大学の司書課程と比べて珍しいようです。目録法の演習では、毎週目録カードを書きあげて提出すると、先生が次の授業までにひとつひとつ添削してくださいました。合計百人近い受講生のカードの添削はそれだけで大変なのではないかと思いますが、添削していただいたことで、一つ一つのポイントを押さえることができたと思います。自分の書いた目録カード（今でも保管してあります）を見ると、当時の事が懐かしく思い出されます。

図書館の蔵書管理や貸出管理にコンピュータが利用されることは今や当たり前になっています。目録カードなんて一度も見たことがないという人も、最近はずいぶん多くなったようですが、図書の情報（書名や著者名、サイズ、ページ数など）を書誌情報として登録する、目録法そのものには変わりありません。手書きで目録カードを作ったことで、目録データがどのように作られているか、データベースの仕組みをきちんと理解することができました。それが今、資料を検索し利用者に提供する際に「いかにデータを活用できるか」にもつながっていると感じます。

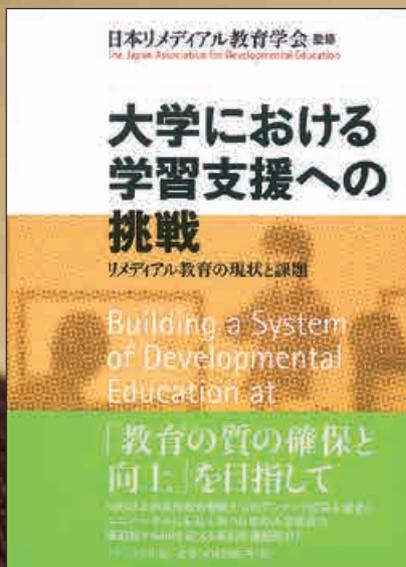
基本を大事に、身近な「まちの図書館」の司書として、今後も頑張っていきたいと思っています。



名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第2回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。



日本リメディアル教育学会監修
『大学における学習支援の挑戦』
2012年9月 ナカニシヤ出版

平成17(2005)年に設立した日本リメディアル教育学会が、各大学における入学前・入学後の基礎教育の実施状況を調査し、事例集としてまとめあげた一冊。「はじめに」に「本書は現在の日本の大学教育の最前線をありのままに示したものである」とあるように、全国の大学に対して実施されたアンケート(データは2011年4月現在のものとしている)をもとに、各大学で実施されている学修支援教育の状況をデータ化し、一覧できるようになっている。この事例集を紐解くことにより、各大学の先進的な取り組みや成功事例を知ることができ、振り返って自身の大学の学修支援に役立てる一助とすることが本書の最大のねらいであると言える。

全体の構成は7つのChapterに分けられ、それぞれアンケートの概要、プレースメントテスト、入学前教育、初年次・導入教育、国語リメディアル教育と大学生のための日本語教育、リメディアル教育、学習支援センターから成り立っている。また、各Chapterには概要や解説があり、2011年時点での日本の大学教育の状況を俯瞰できるようになっている。

おそらく、編者がかつても主張したいことは、こういったリメディアル教育等の学修支援は成果がすぐには現れてこないということだろう。本書の大半が事例集となっている点からもそれがうかがえる。だが、短期的ではなく4年間の学びという視点に立てば着実に成果を出している事例もある。こういった事例を目の当たりにすることは、一見茫漠としてつかみ所のない、あるいはいちごっこにしかならないように感じられる学修支援に取り組むにあたって、大いに励まされる思いである。

最後に、こういった成果を上げた学生は総じてコミュニケーション能力が高いという。これについては今後の検証を待ちたいが、普段学生と接している教職員の中には首を縦に振る方も多いのではないだろうか。4年間の学びを経て社会に学生(若者)を送り出すのだという位置に立てば、その学生(若者)が巣立っていく際に何をどのように後押しすればよいのかを考えさせてくれる一冊である。(鈴木)

書籍紹介

谷川 祐稔 他『学習支援を「トータル・プロデュース」する』
2005年9月 明治図書出版

本書は、「プロデュース」という言葉の通り、学生本人を主体とした大学教育を、いかに企画運営していくかを述べたものである。本書は4章から成立しているが、とりわけ第1章「日米の学習支援の状況と実践例」では、アメリカ発の「学習支援」の歴史と日本で「学習支援」が導入された背景が整理され、かつ「リメディアル教育」や「初年次教育」というタームについても解説がなされている。さらに、第4章「学習支援のトータル・デザイン」では学生相談の難しさについてかなりの紙面を割いて述べられている。従来、大学教員の学生対応については「一人で抱え込まないこと」や「連携して支援に当たること」が重要であるとされてきた。確かにそれは注意すべきことではあるが、本書には著者が実際に学生対応をした上でその難しさ

を述べており、これはオフィスアワーでの学生対応に大いに参考になるといえよう。

溝上 慎一『大学生の学び・入門——大学での勉強は役に立つ!』
2006年3月 有斐閣

本書は学生に向けて執筆されたものだが、教員にとっては学修支援の手がかりとなる一冊である。学生と接してしばしば感じる、「何がわからないのかわからない」、「何が必要なかわからない」という茫漠とした悩みに対して答える際に参考になるだろう。巻末の「類書ガイド」は、大学での学びの準備としてちょうど良いものがそろえられており、学生による「大学生の学び方レポート」は、現代の学生が試行錯誤する生の様子が垣間見られる。

教育開発推進機構彙報

(平成25年7月1日～12月31日)

※肩書きは等は当時のもの

会議

○運営委員会

第2回：7月17日 第3回：12月11日

○教育開発センター委員会

第2回：7月17日 第5回：9月19日
第6回：11月6日

○共通教育センター委員会

第4回：7月17日 第5回：10月2日
第6回：11月6日 第7回：12月4日

○学修支援センター委員会

第3回：7月17日 第4回：10月2日
第5回：11月20日

行事

○講演会・シンポジウム

7月3日：平成25年度FD講演会

「主体的に学び続ける学生をいかに育成するかーアクティブ・ラーニングの可能性ー」

講師：杉原真晃准教授（山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センター）

会場：渋谷キャンパス若木タワー地下1階02会議室

11月8日：國學院大學人間開発学会第5回大会 公開シンポジウム「私学教員養成系学部における「質保証」システムをどう構築するか」

会場：國學院大學横浜たまプラーザキャンパス

主催：國學院大學人間開発学会・國學院大學人間開発学部

共催：本機構

研修会・打ち合わせ会等

7月30日：ノートテイク報告会

7月31日：前期SA（スチューデント・アシスタント）最終報告会

10月4日：後期SA研修

10月9日：ノートテイク研修会

11月16日：後期SA中間報告会

FD活動、教育支援

7月6日：FDワークショップ

（兼・平成25年度第2回初任者研修）

「ループリック評価の実際ー学修達成度評価の方法ー」

講師：井上史子准教授（帝京大学高等教育開発センター）

12月14日：FDワークショップ

（兼・平成25年度第3回初任者研修）

「シラバスと授業の到達目標の書き方」(授業設計論演習Ⅰ)

講師：柴崎和夫教授（本学教務部長、本機構副機構長）

「聴き手に求められる力」(心理学演習Ⅰ)

講師：林泰子講師（立命館大学）

出張等

7月5日：FD研修会

「聴覚・視覚障害学生の修学環境向上のために」に参加（佐川准教授・高橋書記、於筑波技術大学）

8月29日～30日：日本リメディアル教育学会第9回全国大会参加（鈴木助教、於広島修道大学）

10月4～5日：ファカルティ・ディベロッパー／SDコーディネーター養成講座in京都に参加（小濱助教、於キャンパスプラザ京都）

10月12日：河合塾FDセミナーに参加（中山准教授、於河合塾麴町校）

11月6日：丸善・大学経営セミナー「待ったなしの大学改革」に参加（新井准教授、於霞が関ビル）

11月31日～12月1日：大学教育学会2013年度課題研究集會に参加（中山准教授、於同志社大学今出川キャンパス）

12月23日：全国私立大学FD連携フォーラム会員校ミーティング出席（中山准教授、於立命館大学東京キャンパス）

刊行物（平成26年）

1月31日：教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース』第9号

2月：『平成24（2012）年度授業評価アンケート分析報告書』

★新任職員紹介



朝比奈 友（教学事務部教務課長補佐）

みなさん。教育開発推進機構で、毎年募集している「SA」や「ノートテイカー」って、知っていますか？ 大学での主役は、もちろん学生のみなさんです。みなさんが自ら参画することで、大学の授業は成り立っているのです。この「教育開発ニュース」を手にとられた学生の方は、ぜひ下欄の募集要項をご覧ください、國學院大学の「学び」を支えてください。

★SA(スチューデント・アシスタント)募集

教育開発推進機構では、大人数授業での教育効果の向上を目指して、SA（スチューデント・アシスタント）制度を実施しています。主な作業は教材の印刷や配布、出席カードの整理等です。学内で、空いている時間を使ってできるので、必要なのは「やってみよう！」という前向きな姿勢と、仕事に対する責任感だけです。SAとして活動し、大学生活をより充実させてみませんか？

[対象] 2年生～4年生

[募集期間] 前期：4月履修登録期間

※スチューデント・アシスタントは成績評価に関わる業務は行いません。

★ノートテイカー募集

教育開発推進機構では、聴覚障害のある学生のためにノートテイク（講義内容の要約筆記）をしてくれる意欲ある学生を募集しています。研修を行いますので、初心者でも大丈夫です。

[対象] 2年生以上

[勤務時間] 1コマ90分（曜時不定）

※業務内容・採用期間・給与等の詳細については募集時に学内に掲示します。

そっ たく どう じ
啖 啖 同時

— 編集後記 —

「教育開発ニュース」第9号をお送りします。SA（スチューデント・アシスタント）特集では、これまで図書館の利用法や望ましい授業の在り方についてSAが語り合うなどの企画を行って来ましたが、今回は、SAの業務それ自体についてアシスタントの学生たちが考えていること、工夫していること、やりがいなどを語っていただきました。SAに応募したいと考えている学生にとっても、参考になる内容となっているのではないかと思います。

また、平成25年度FD講演会の概要も掲載させていただきました。テーマであるアクティブ・ラーニングには、今やFDに関心を持つ先生方から熱い視線が注がれていますが、講演では、具体的な授業の運営方法をどうすれば良いか、またメリットだけでなく、デメリットはどういうところにあるのかなど、突っ込んだ話がなされており、興味深いものとなっています。是非ご一読下さい。（小濱）

教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース！』第9号 平成26年1月31日発行

発行人 加藤季夫 編集人 鈴木崇義・小濱 歩 発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28